

三無主義

会の理念を尋ねられることがあるが、冗談の通じる者に対しては、私は「無思想・無節操・無駄」の三無主義である、と答えて人をケムに巻く。

第一の「無思想」とは、特別な考えや立場、思想信条、理論に囚われないことであり、とだいな人間の思想などタカが知れているという我々の現地体験から生まれた諦観に基づいている。ペシャワール会の発足した初めには、「〇〇主義」の論客も居ないではなかったが、そのうち自然に離れていった。自分だけ盛り上がる慈悲心や、万事を自分のものさしで裁断する論理は、我々の苦手とするところである。

例えば難民キャンプで、食うや食わずの子供の明るい笑顔を、「哀れな人を助けなければ」と頑張っている外国人ボランティアの暗い表情と比べて見ると、私はひそかに忍び笑いを催すのである。何も失うものがない人々の天真爛漫な楽天性というのは確かにある。

名誉財産はもちろん、いこじな主義主張を人が持ち始めると、それを守るためにどこか不自然な偽りが生まれ、ろくなことはないものである。良心や徳と呼ばれるものでさえ、「その人の輝きではなく、もっと大きなもの、人間が共通に属する神聖な輝きである」という或る神学者の主張は頷けるものがある。これを自分の業績や所有とするところに倒錯があり、気づかぬ傲りや偽りを生ずるとというのが私のささやかな確信の一つである。

第二の「無節操」とは、誰からでも募金を取ることである。乞食から取ったこともある。これは説明を要する。赴任して程なく、私はことばの練習を兼ねてバザールをうるついていた時期があった。時に乞食にも遭遇する。一般にペシャワールの職業的乞食はわりあい堂々としており、「右や左の旦那さま」という



惨めたらしきはない。「コダーイ・デール・コシヤリーギー（神は喜ばれます）」と述べ、「出せ」とばかりに手をさしだす者もある。

私も暇であったから、「人から施しを受けるに少し態度がデカイのではないか、『済みませんが、ただけでないでしょうか』くらいの腰の低さがあつた方が実入りが多いのではないか」と問い糺したところ、ある乞食が案外まじめに説明してくれた。

「あなたは神を信するムサルマン（イスラム教徒）ではありませんな。ザカート（施し）というのは貧乏人に余り金を投げやるものではありませんぞ。貧者に恵みを与えるのは、神に対して徳を積むことですぞ。その心を忘れてはザカートもありません。」

この乞食が高僧のような気がした。

私も人に見捨てられたジユザーム（らい）の患者のために、はるか東方から来てかくかくしかじかの仕事をしておる。ならば、私もムサルマンで、これもザカートということになりはしないか。」

「そのとおり。」

「ならば、あなたも我々の仕事に施しをしなされ。神は喜ばれますぞ。」

私がぬつと手を出すと、乞食は集めた小銭をちゆうちよなくくれた。私はまさかとは思ったが、つまらぬ議論に神を引き合いに出し、何か大切なものを冒涇したような気がして畏れを覚えた。

同時に、純朴な人達だと思った。以後、我々もこれを採用し、「貧しい人に愛の手を」などという惨めたらしい募金はせず、「神は喜ばれます」とこそ言わないが、年金暮らしのお年寄りの千円も大きな団体の数百万円も等価のものとして、感謝していただくことにしている。現地の人には心までは貧しくないのがある。



第三の「無駄」とは、後で「無駄なことをした」と失敗を素直に言えないところに成功も生まれないということである。いつも大本営発表のように、訳知り顔に日本側に成功のニュースを届けて喜ばせるのが目的となつては本末転倒で、嬉しいことも辛いことも、成功も失敗も、共に泣き笑いを分かち合おうというのである。そもそも、このような仕事自身が、経済性から見れば見返りがないムダである。

時に募金のために活動をアピールすることがあっても、我々は自分を売り渡す騒々しい自己宣伝とは無縁であつたと思う。この不器用な朴訥さは、事実さえ商品に仕立てるジャーナリストからもしばしば煙たがられた。だが、こうしてこそ、我々は現地活動の初志を見失う事なく活動を継続できたのである。

